



年頭のご挨拶

医学研究科長・医学部長 本 間 研 一



新年、おめでとうございます。今年が、皆様にとって良い年であることを祈念致します。

さて、国立大学が法人化されて3年が経過し、北大そして医学研究科・医学部の課題も次第にはっきりとしてきました。今年は、全学的には、佐伯新総長

を頂点とする新しい北大執行部の誕生、教員制度の改定、事務・技術職員の定員削減など、大きな変革が予定されています。また、医学研究科・医学部では、研究科の組織再編、大学院（博士課程、修士課程）新カリキュラムの導入、学士編入者入学の10月への移行、東北棟および北棟の耐震改修が実施され、また、研究科長、病院長の任期満了に伴う選挙が行われます。今年は、期待が大きく膨らむ中、過渡期の混乱も予想されるあわただしい年となりそうです。

新しい総長と執行体制

昨年の総長選挙では、不肖私が総長候補となり、医系部局の現状と北大における役割、病院経営の重要性などを訴え、次点となりました。医系教員の声は全学に届いたと確信しております。皆様のご支援に対し、改めてお礼申し上げます。北大には課題が山積していますが、佐伯新総長の手腕に期待するとともに、医学研究科・医学部も責任をもって北大運営に関与していかなければならないと思います。

新しい教員制度

教員制度改正の骨子はすでにご存知のことと思います。これまで助教授、講師、助手は「教授の教育研究を助けるもの」と定義されておりましたが、今回、新しく准教授と助教が制定され、「自ら教育研究を行うもの」と定義されました。助教授職は廃止され、助手は新規採用を行わず、教育研究の補助的な役割に限定されます。この新制度は、単なる教員名称の変更にとどまらず、その権限と責任を明確にした点で画期的であり、ま

た助教のポジションをキャリアパスと位置付け、任期制を導入したことも特徴の1つです。北大の基本方針は、助教は5年任期制で再任は1度までとなっていますが（つまり10年在籍したら北大を退職する）、医学研究科では、助教を2段階とする独自の案を検討しています。つまり、新採用の助教はすべて再任なしの5年任期付ジュニア助教とし、3～5年間の業績により、任期なしのテニユア助教、講師、准教授に移行する制度です。また、ジュニア助教はすべて研究科長付とし、各分野に配分することを計画しています。新任の助教に任期制を付すのは、大学教員としての能力と適正を判断するには時間が必要だからです。つまり、教員の養成に研究科としても責任をもって取り組む考えです。また、給与面での待遇も改善される予定です。助教も大学院教育に一定程度関与することにより、調整数2の手当てを受けることが可能となります。

准教授については、学位論文指導と審査権を付与することを検討しています。しかし、従来学位論文を指導できる者（教授）は、大学院設置審議会で厳密に審査するか、あるいは審査を付託された大学院教授会が決定していました（教授選考）。医学研究科では、准教授が学位論文指導者となる場合、大学院教授会で教授選考に準じた方法で資格審査を行うことを検討しています。その場合重要視されるのは、研究業績もさることながら、4年間の課程教育を、責任をもって指導できる体制と研究費の確保です。

組織再編

医学研究科の組織再編で、従来の6専攻は1専攻となり、コース制が導入されることは、すでに機会あるごとにお伝えしてきました。特に、臨床医学コースでは学外に連携講座を設置し、臨床の第一線で臨床医学研究を中心とした大学院教育を行う予定です。連携する医療機関と連携教員の選定もほぼ終了しています。昨年北大では、部局教員人件費の大幅な削減があり、教員組織も定員管理から人件費管理に移行しました。これにより、大学設置審議会で決められた大学院教育、学部教育に必要

な科目と教員数を確保すれば、あとは研究科の裁量で柔軟な組織編成や人事が可能となりました。医学研究科では、総人件費の枠内で特別昇任や分野定員によらない教員採用を可能にする制度をつくりましたが、今後、これをどのように活用していくかが課題となります。

インフラ整備

今年は、東北研究棟と北研究棟の耐震改修工事が行われます。東北棟の工事が終了した後に北棟の工事が始まる日程でしたが、北棟の改修工事が平成19年度予算ではなく、平成18年度の補正予算で行われるため、2つの工事時期が重なる可能性が出てきました。改修後の東北棟には、分子解剖学、病態医科学、血液内科学、腫瘍内科学、運動機能再建医学の5分野が入るほか、連携研究センターに属する連携分野、医学教育開発室、国際連携室、広報室の他、大学院連携講座の管理室などが入る予定です。また、改修後の北棟には組織細胞学、解剖発生学、分子生物学、分子医化学、の4分野が入ります。平成20年度の概算要求では、最後に残った中研究棟の耐震改修を申請する予定です。また、平成21年度に管理棟跡地に建設予定の医学部会館に先立ち、図書館の改修を予定しております。図書館には、閲覧室や書庫の他、管理棟解体で消失する基礎講堂や学生実習室を作る計画です。

社会貢献

法人化された国立大学の課題の1つに社会貢献があります。特に、社会との接点が多い北大病院や医系部局には国民の期待も大きく、その活動は常に注目されています。しかし、大学病院や医学研究科・医学部の現状についての社会の認識は必ずしも正しいものではありません。その責任の一端は私達自身にもあり、医学研究科・医学部の情報を社会に向けて発信していく必要があります。新しく設置される広報室は、その役割を負う部署でもあります。また、大学における研究成果をいかにして国民に還元していくかも考えなければなりません。もちろん、これは1研究者が出来ることではなく、成果還元

のシステムを医学研究科が中心となって構想していくことが必要です。TR（Translational Research）拠点形成もその1つです。また、現在問題になっている医師の地域偏在、診療科偏在は、基本的には行政の責任であるとしても、地域貢献、卒後医師研修の観点から大学も出来る範囲の努力はしていかなければならないと考えております。道内3医育大学の協力が必要な時期になっていきます。

北大医学部創立90周年記念事業

2009年に迎える北大医学部創立90周年を記念して、医学部会館の建立と図書館の改修を計画し、現在そのための募金活動を進めています。すでに教員の25%からご協力を頂いておりますが、同窓会など外部に向けての活動を推進するためには、現職教員の強い熱意が必要です。その為にも今年の3月までには達成率を100%にしたいと考えております。ご協力のほど、よろしくお願い致します。

展 望

運営費交付金が確実に減少し、部局等に配分される教育研究経費がそれ以上に少なくなっている厳しい財政状況、教職員数の削減によるマンパワーの低下、法人化や法規制の強化にともなう新しい業務の増加など、大学の管理運営が従来の手法では成り立たないのは誰もが認識しているところです。また医学研究科・医学部の特殊性として、大学病院の診療や経営に直接かかわっている臨床系教員の教育研究環境の確保が重要な課題となっています。これらの条件下で、医学研究科の研究教育を維持し、さらに発展させていくためには、インフラ整備を早急に完成させるとともに、外部資金の持続的導入と人件費の確保を図ることが重要です。その為の道筋は出来つつあり、すでに一部では成果も出始めています。今年は、医学研究科・医学部反攻の年と位置付け、教職員が一体となってこの難局を突破しようではありませんか。

年頭にあたって

北海道大学医学部保健学科学科長 松野 一彦



平成19年（2007年）を迎えるにあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

まずは、日頃、医学部保健学科の学生の教育につきまして、多大なるご協力をいただいておりますことに、心から御礼申し上げます。おかげさまで、医学

部保健学科は本年4月に第1期生が最終学年である4年生となります。残り1年数ヶ月にわたる専門教育、臨地実習、卒業研究を終えると平成20年3月に無事卒業して、医療専門職として社会に巣立ちます。

近年、目覚ましく進歩する医学・医療の中で、看護師、保健師、助産師、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士の役割は益々重要なものとなっております。それぞれの専門分野での最先端の知識と実践技術を有するより高度な医療専門職ならびに指導者の育成と、次世代の保健科学を担う高度医療専門分野における教育・研究者を育成することを目的として、保健学科で

は大学院の設置を計画しています。現在、医学研究科長、副研究科長のご指導をいただきながら、平成20年4月の2年制の修士課程ならびに3年制の博士後期課程の設置に向けて計画をまとめる最終段階に入っています。今後、さらに皆様方のご指導をいただく機会が増えることと思いますが、よろしくお願いいたします。

医療技術短期大学部の方は、3月の専攻科助産学特別専攻の学生20名の修了をもって閉校を迎えることとなります。これまで20数年間にわたり、非常勤講師ならびに病院実習その他で多くの先生方のお世話になりましたことに深く御礼申し上げます。

私事になりますが、平成13年4月から6年間にわたりまして努めて参りました医療技術短期大学部長ならびに保健学科長も3月で任期が切れ、退任することになりました。今までお寄せいただいたご厚情に心から感謝致します。

今後とも医学部保健学科に対しまして、皆様方のさらなるご支援をいただけますようお願いいたしまして、年頭のご挨拶といたします。

新任教授挨拶

分子・細胞イメージング部門光生物学分野 近江谷 克裕



平成18年10月1日付で北海道大学大学院医学研究科連携センター分子・細胞イメージング部門光生物学分野教授に就任いたしました近江谷克裕です。昭和35年北海道函館市に生まれ、20歳代に北海道を飛び出して以来、四半世紀を経て、北海道に

戻って参りました。私の所属する大学院医学研究科連携センターとは聞きなれない名称と思いますが、06年度春に開設した医学研究科の新センターであり、主に新たな医工連携やトランスレーショナルリサーチを目指し、医療技術や創薬開発技術のイノベーションを担います。ポストゲノムといわれる昨今、ゲノム情報が解読され、内在する2万数千種のタンパクの遺伝子の配列が解明されたものの、それらタンパクがいつ、どこで発現し仕事するのか、或いはどのような状況で発現が変化し生体機能を担うのか十分に解明されておられません。そのような状

況の中、複雑な生体システムを理解する技術として“イメージング”が注目されています。分子・細胞イメージングは一つ一つの遺伝子の振る舞いを細胞レベルで可視化する技術であり、連携センターでは身体の仕組みや病態に関わる生体情報を可視化し、そこから新規の医療技術や創薬開発を行うことを狙っています。私はこれまでに「ホタルの光」で代表される生物発光を基盤とした発光・蛍光分子プローブを創製、細胞に導入し、光イメージングによって細胞内の複雑な遺伝子発現を解析する系などを立ち上げております。その結果、発光システムを導入した細胞から薬の効果や化学物質の毒性を光の変化で捉えること、或いは24時間周期に変動する時計遺伝子の動きを光によって追跡することに成功しております。これらの技術は、既に複数の会社より商品として販売されており、皆さんの身近なところで活躍しております。今後、連携センターは、北海道大学では分子イメージングを推進する上で先端生命科学研究院や電子科学研究所との横の連携を含めてハード及びソフト面において先端

的な研究が出来ることから、医系分野における分子イメージングのトップを目指したいと思っております。興味がある方は是非、共同研究いたしましょう。一方、私のユニークな研究テーマとして、発光生物の生物学として、世界各国の発光生物をフィールド調査し、新規の発光プローブの探索や発光生物群の遺伝子解析より生き物の生物地理及び生物進化の解明などにも取り組んでおります。フィールドと実験室、どちらも私の大切な研究の場となっております。地球を相手に研究することが好き

な方も、是非一緒に研究しましょう。さらに私は国際生物発光化学発光学会の幹事、日本生化学会の評議員を務めており、光と生物の関わりを学問する光生物学、生物発光関連を中心とした酵素化学・天然物有機化学、或いはタンパク改変等の遺伝子工学などの経験を積んでおります。医系教育においても、これまでの経験を發揮、良き医師の育成、医系研究者の育成に努めたいと思っております。趣味は海外旅行、水泳や昆虫採集、家族構成は一妻一女一男、今後ともよろしくお願いいたします。

新任教授挨拶

放射線医学分野 白 土 博 樹



北海道大学病院長にご就任された前任の放射線医学分野宮坂和男教授の後を継ぎ、平成18年10月16日付けで、同分野教授を拝命いたしました。昭和24年～昭和46年の医学部放射線医学講座若林勝初代教授、昭和46年～平成4年の入江五朗教授、平成4年～平成18年の宮坂和男教授に続き、放射線医学分野教授としては4代目になります。大学病院では放射線科長として診療に当たります。

学生時代には、医学部ボート部に入っており、茨戸湖での朝練・夕練・合宿生活が懐かしく思い出されます。25年前に北大医学部を卒業したとき、「北大がビルの集合体になっていってもせめて北大の気風だけは大切にしよう。」と卒業アルバムに書いたのですが、その気持ちに変わりはありません。ただ、予想よりも北大内の自然は残っており、この環境の中で仕事を続けられることに大変感謝しております。

放射線医学分野の中は、放射線診断部門と放射線治療部門に分かれています。前者はCT/MRIなどの画像診断とIVR（血管造影の技術を用いた診断治療）、後者はX線や粒子線などによるがんなどの病気の治療です。自分自身は放射線治療が専門で、各診療科と共同で定位放射線照射や動体追跡放射線治療を開発研究してきました。放射線診断部門は前宮坂教授が育てられた優秀なスタッフに恵まれており、診断に関しては自分は旗振り役を任じております。

放射線科の大領域の中には、アイソトープを注射や経口投与して診断・治療をする核医学も含まれますが、こ

の医療は玉木長良教授の核医学分野が担当されております。我々放射線医学分野は、電離放射線や磁場や超音波を体外の装置で発生し、これらを利用し診断・治療する医療を担当している、というのが実情です。ただ、どちらも放射線科という大領域の仲間であり、教育も研究もかなり一緒にやっています。最近では、分子イメージングという新たな画像科学領域を共に研究し、「先端融合領域イノベーション創出拠点の形成」という大型の科学振興調整費の獲得に結びつきました。同プロジェクトは、医学研究科・先端生命科学研究院・日立製作所・塩野義製薬の協働開発研究で「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」を目指しており、私も研究者の一員として参画し世界的な拠点形成と北海道の地域振興を結びつけるために努力しております。

放射線医学自体は、最先端の理工学系の技術を医学に常に取り入れて、それで新しいものをつくっていく、ということの繰り返しです。別に、自分自身が理工系に強いわけではなく、新しい技術とか科学的な発見を医療領域に活かすことに興味を持って、この分野に入ってきました。しかしながら、昨今は、コンピューターサイエンスの怒涛の中で、自分たちが医師としての責務を果たすためには、医学数学や医学物理学の専門家が病院内に必要になってきており、理工系修士・博士に医療現場で活躍の場を与えるための努力も重要な仕事の一部になっております。いまや、病院というのは、医師と看護師と技師が務める「建物」ではなく、数々の専門家をつなぐ無数のネットワークが機能して初めて成り立つ「生命体」です。今後は、放射線医学分野が、工学研究科、情報科学研究科、理学研究院など多数の理工系分野との橋渡し役として機能できれば、と思っております。

新任教授挨拶

保健学科放射線技術科学専攻 小笠原 克彦



このたび、12月1日付けで北海道大学医学部保健学科放射線技術科学専攻医用情報科学分野教授を拝命いたしました。北海道大学医学部保健学科の先生方・関係者の皆様に深く感謝しお礼申し上げます。

私は昭和63年に保健学科放射線技術科学専攻の前身である医療技術短期大学部診療放射線技術学科を卒業いたしました。医療技術短期大学・医学部保健学科での勤務は、7年目となりましたが、改めて今、教授として母校にての研究と後輩の教育を担当させて頂くことになり、その責任の重さと共に、大きなやりがいを感じております。平成20年には保健学科が母体となる大学院を立ち上げる予定となっていることから、その教育体制の確立と研究基盤の構築という新たな目標に向けて、積極的に取り組んで行きたいと思っております。何卒ご指導をよろしくお願いいたします。

簡単に自己紹介をさせて頂きますと、私は昭和41年に東京で生まれ、千葉県で育ちました。北海道大学医療技術短期大学部卒業後、札幌北楡病院放射線科、室蘭工業大学情報工学科及び新日鉄室蘭総合病院を経て、慶應義塾大学大学院医学研究科修士課程に進学いたしました。室工大では生理工学の小野功一教授と知識工学の魚住超助教授に、慶大では放射線科学教室にて核医学の久保敦司教授と放射線情報学の安藤裕助教授に御指導いただきました。その後、博士課程より北海道大学に戻り、医療情報学分野・櫻井恒太郎教授に御指導いただき、現在に至っております。

現在の私の主専門は、医療情報学です。診療放射線技師という背景から当初、医用画像工学に興味を持っていたのですが、博士課程の頃からは、医療情報学・医療経済学に面白さを感じ、現在に至っております。近年の医療情報学の学問領域は、画像情報システムや電子カルテシステムに留まらず、Public Health InformaticsからBio-informaticsまで、更には医療情報倫理・情報教育から医療経営管理を含むまでに広がっております。私は、これら幅広い領域の中でも、医療技術の公平性と効率性からの評価を試みる臨床経済学、地図情報システム（GIS）や大規模データベースを活用したPublic Health Informatics、毎日大量に発生する診療情報の

体系だった構造化を試みるMedical Ontologyの3領域に興味を持っております。特に最近では、臨床経済学やPublic Health Informaticsに関する研究・教育を進める上で、医療情報と医療経営の融合が必要であると強く感じたことから、昨年より小樽商科大学ビジネススクール（MBA）に社会人学生として通っており、帰宅後は朝方まで、財務会計や組織論などの課題と格闘しています。今後、医療情報学・医療経済学にビジネススクールで得た経営管理の視点を加えて、これらの分野で日本・世界をリードできるよう、研究環境を整えながら更に研究・教育を進めて行きたいと考えております。

保健学科における教育ですが、医療短大時代の教育は、3年という短い時間に4年制大学以上の内容を教育しなければならない事情から、カリキュラムを消化することが優先され、「じっくりと取り組む・考える」教育ができませんでした。保健学科となったことで、4年次の卒業研究や新設される大学院での教育を通じて、研究マインドを持つ医療従事者の教育、臨床を理解できる保健学研究者の育成を実践することが可能になると考えております。また、保健学は多くの医療職種が戦後創設されていることから歴史が浅く、既存の医学や科学・技術に依存している部分も多いだけに、十分に確立しているとは言えません。しかし、一方、それだけに研究しなければならない領域も多く、発展する可能性を大きく秘めていると感じています。医療職種にとらわれずに、新しい領域や融合領域にチャレンジできる人材の教育を実践したいと考えております。最後に、保健学における情報学教育の役割ですが、保健学科は、看護学、放射線技術科学、検査技術科学、理学療法学、作業療法学と言った高い独自性を維持しつつ、医療という共通なフィールドの中で協力関係を必要とする複雑な連合体です。医療情報学はある特定の領域に依存しにくいことから、情報という視点から、広い視野で各領域を緩やかに結び、より強固な関係を作るための教育を担うことができるのではないかと考えています。

何分にも浅学非才の若輩者であり、甚だ微力でございますが、医療情報学を通じて保健学の確立と教育の充実に向けて、全力で取り組みたいと考えております。今後、一層の御指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

医学研究科東北棟の改修について

副研究科長 安 田 和 則

現在、医学研究科東北棟の改修が始まっています。この改修は北海道大学において従来から行われてきた施設の改修とは全く異なる計画に基づいて、医学研究科が独自の財政基盤の上で行うものです。その背景や概要について説明させていただきます。

この改修計画には2つの背景があります。第一は、独立行政法人北海道大学の財政的問題に関する背景です。国立大学が独立行政法人となった後も、国立大学の施設改修費は国家予算から支出されています。医学研究科は南棟、東南棟、東北棟、北棟、中棟、管理棟の順に改修を進める計画を立て、それを順次実施してきました。しかし東南棟の改修が修了した頃、この計画に大きな支障が生じました。それは国家予算における文教予算の大幅な削減です。特に旧国立大学の施設関連予算は大きく圧縮され、次に予定された東北棟の改修に関する概算要求は2年続けて認められませんでした。さらにその頃、各建築物の老朽度の評価に耐震係数が導入され、東北棟はこれが0.44と算定されたために概算要求による改修は現実的には不可能となるに至りました。

第二は、現在の厳しい研究教育行政の中で医学研究科が今後も発展を続けるための戦略に関する背景です。近年、大学の運営費交付金は減少の一途をたどり、外部資金の導入を図らなくては大学院生の教育もできないという状況が生じています。大学院重点化後も北海道大学医学研究科は個々の研究者の努力により、様々な分野で多くの外部資金を獲得してきました。しかし、科学振興調

整費やCOEなどの超大型国家プロジェクトを獲得することはできず、これは外部資金獲得に関する医学研究科としての組織的な取り組みが残念ながら十分ではなかったと言わざるを得ません。さらに昨年、これに追い打ちをかける事態が起きました。医学研究科・医学部全体で教授6、助教授5、助手5に相当する教員削減です。このような状況を放置すると、さらなる悪循環をもたらすことが危惧され、それを回避するために医学研究科は緊急に何らかの組織的対策を立てる必要がありました。

そこで、この東北棟の改修を含む一連の計画が本間研究科長の指揮の下で立案されました。それは「東北棟を中心施設とする北海道大学医学研究科連携研究センター「フラテ」を創設し、ここにスペースを確保して戦略的連携・融合研究を推進することによって外部資金の組織的獲得の核とし、また大学規模での戦略的教員再配置の受け皿とする、そしてこの計画の核となる東北棟は医学研究科の自己資金で改修をする」という計画です。

北海道大学医学研究科連携研究センター「フラテ」は、堅実な知の探求と大胆な知の創造をバランスよく追及するための組織体制として、教授会の議を経て平成18年4月に医学研究科に創設されました（図1）。ちなみにフラテとはイタリア語で同胞を意味します。これは北海道大学内の他部局、他の研究機関、企業などと連携して、広い領域の科学技術の成果を医療や健康維持活動分野におけるイノベーションへ発展させるための研究を行うことを目的にしています。連携研究センター「フラテ」は

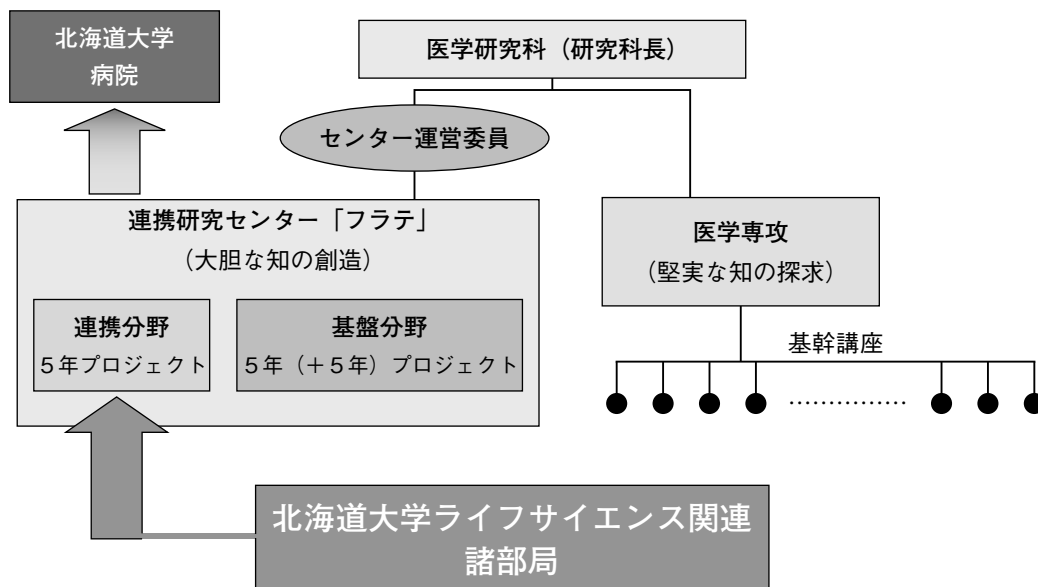


図1 連携研究センターの組織

長期的展望に基づいた基盤的研究と目標を設定した戦略的研究とを融合するプラットフォームであり、基盤的研究成果を医療へ結びつけるための渡し舟です。現在、連携センターでは北大が獲得した大型プロジェクトである「脳科学研究教育センター」、「未来創薬医療イノベーション拠点形成」、科学振興調整費「北大リサーチ&ビジネスパーク構想」、21世紀COE「人獣共通感染症制圧」などによって予算化されている脳科学部門、分子細胞イメージング部門、再生医療組織工学部門、人獣共通感染症診断治療部門の4部門がすでに立ち上がっており、現時点では3つの基幹分野（時間生理学分野、放射線医学分野、運動機能再建医学分野）とそれに連携する3つの連携分野（光生物学分野、放射線生物医学分野、高機能代替支持組織開発医学分野）、および2つの寄付講座（分子イメージング講座、時間医学講座）が所属しています。連携分野は運営がすべて外部資金で行われること、5年の時限付き設置であること、教員は学部教育を免除されること、などが今までにない特長です。

「医学研究科の自己資金で東北棟を改修する」ということの意味を少し説明させていただきます。医学研究科の多くの分野は国庫（委任経理）に自己資金を保有しており、そのプールされた自己資金全体の中のはば一定額は毎年使用されずに次年度へ繰り越されています。そこでこの繰り越される資金の一部を北海道大学（実際は医学研究科）が借りてこの改修事業を行い、それを北海道大学（実際は医学研究科）が運営費交付金の中から5年計画で返済する予定です。各分野は自己資金の使用に制限をする必要はありません。もちろんこの改修は医学研究科にとって大きな負担であります。しかし今後の発展のためにどうしても必要な投資であるというご理解をいただき、この計画案は教授会の全会一致で承認されました。返済計画もしっかりと立てております。このような自己資金の有効活用は、おそらく本邦で初めてと思わ

れ、実施に際しては様々なハードルもありましたが、北海道大学内のすべての関係者の理解と努力によって実現の運びとなりました。

改修は北海道大学施設部が担当していますが、医学研究科の意見を設計や設備計画に全面的に取り入れていただき、また自己資金による改修に妥当な工事価格での発注が行われるように格段の配慮をいただいております。現在、法律に則って入札が行われていますが、電気関係工事はすでに始まりました。改修は平成19年8月に終了する予定です。改修後の東北棟には既存の計画に従って、腫瘍内科学分野（1階）、血液内科学分野（2階）、病態医科学分野（3階）、運動機能再建医学分野（4階）、分子解剖学分野（5階）が入ります。そして2-5階に設置したオープンラボには連携研究センター「フラテ」の連携分野が入ります。また1階および地下の一部は連携大学院や学部教育関連ゾーンとして使用し、多様化する医学教育を多角的に進めるために使用される予定です。

現在、東北棟を核とした医学研究科連携研究センター「フラテ」は、北海道大学の生命医科学研究における医学研究科の姿勢を示す象徴的構想として、全学的によく認知されつつあります。例えばこの構想が昨年の国家的大型プロジェクト「未来創薬医療イノベーション拠点形成」の獲得に大きな貢献をなしたのは、まだ記憶に新しいところです。このように医学研究科連携研究センター「フラテ」構想と表裏一体をなす東北棟改修は、単なる施設の改修のみにとどまらず、医学研究科の今後の発展に貢献できる可能性を秘めています。しかしそれはこれを利用する優れた研究・教育企画提案があつてのものであります。平成19年度にもTR拠点形成やグローバルCOE拠点形成など大きなプロジェクトの公募が控えていますが、医学研究科のすべての構成員の皆様のご理解とご尽力をいただけますようお願いを申し上げます。

医学部創立90周年記念事業基金募金活動の現況 ー第1報ー

医学部創立90周年記念事業実行委員会副委員長 小山 司

新年明けましておめでとうございます。医学部創立90周年記念事業の実現にむけて、本年もまた一層のご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

前号（第29号）で報告したように、記念事業実行委員会は、記念事業後援会の支援のもと、90周年記念事業基金を設け、10億円を目標に、医学部教員はもとより同窓会会員等の関係各方面に幅広く募金をお願いすることになりました。後援会総会でのこの決定を受け、昨年8月末、医学部創立90周年記念事業基金募金趣意書を発送し、募金活動がスタートしました。

平成18年12月26日現在の募金額の現況を表に示します。この時点での寄付金総額は8千万円を超えるに至っています。申し込みがあってもまだ入金されていないものまで含めると、約1億円に達すると推定されます。おおむね順調なスタートが切れたといえましょうか。教員諸兄はじめ医学部・病院所属の皆様には心から謝意を表します。

今後は、募金対象を関係医療法人・企業等にも拡大すべく準備をすすめているところです。これら学外関係者の皆様の賛同を得るためにも教員の募金率100%の達成

は是非実現したいと思っています。現在、約30%に至っています。さらなる御協力を心よりお願いするしだいです。

表：寄附金内訳（18.12.26現在）

寄附金合計 80,253,885円		
〈内 訳〉		
◎教 員	103名／345名（29.9%）	21,530,000円
（内訳）教 授	42名／ 82名（51.2%）	12,720,000円
助教授	20名／ 55名（36.3%）	3,580,000円
講 師	16名／ 53名（30.1%）	2,730,000円
助 手	25名／155名（16.1%）	2,500,000円
◎分 野	1件	1,000,000円
◎同窓生	298名	46,464,000円
◎学生の父母	42名	4,799,885円
◎法人等	9件	5,060,000円
◎篤志家（個人）	3名	400,000円
◎寄附金使途変更	9件	6,800,000円
※うち5,800,000円は教員分へ計上（再掲）		

医学基礎コースガイダンスおよび医学部懇話会（2年次）の開催

教務委員会副委員長 渡 邊 雅 彦

10月2日（月）、学生食堂「はるにれ」において、医学基礎コースガイダンスおよび医学部懇話会が開催された。今回対象となったのは医学基礎コースに進級する第2学年次96名の医学生で、多数の基礎系教員も参加したコースガイダンスと懇話会になった。

医学基礎コースガイダンスでは、教務委員会副委員長から進級要件と学生生活上の諸注意、図書閲覧係長から医学部図書館の利用方法について説明がなされた。特に、最近10名前後となっている医学基礎コースの留年問題について、具体的な数値データを提示して注意を喚起した。

懇話会では、2年次学生の相馬崇宏君の司会により、本間研一学友会会長・医学部長の挨拶、吉岡副研究科長による乾杯、歓談に引き続き、出席した医学基礎コースおよび基本臨床コースの基礎系科目を担当する14分野の教員から授業科目や分野の紹介が行われた。紹介の後、学生から分野教員に質問がなされ、それに教員が答える

形で進行した。実は、学友会委員である阿部圭史君と荒木大君が、予め質問を行う学生を割り振っておいたため、実にさまざまな質問が用意されていた。一方、教員からも、個性あふれる答弁から、「教科書を買え！」というような絶叫まで飛び出した。紹介が終わって時計を



医学部懇話会の風景

見ると、予定していた1時間半がほぼ過ぎており、2年次学生の太田桂一君の場慣れしたメの乾杯で閉会となった。

これまでは医学教養コースから医学基礎コースに進級してきた学生は、基礎系科目を1つずつ習得しながらコースを担当する分野や教員と徐々に接してきた。今回

のような懇話会を行うことにより、コースの最初の段階で全体像を知り、それから1つ1つの科目がスタートすることになる。このような試みが、学生の学修意欲を向上させ、顔が見える学生・教員の関係構築に寄与することを願っている。

医学部保健学科第2回市民公開講座 「老化を学んで健やかに」

医学部保健学科看護学専攻 教授 齋 藤 健

医学部保健学科では、平成18年9月9日（土）午後1時から、医学部臨床大講堂において、市民公開講座を開催しました。この公開講座は、市民の方々に保健学科での教育・研究内容をご理解いただくと共に、健康の保持・増進に役立つ最新の研究成果を公開していくことを目的として企画されたものです。医学部保健学科としては2回目にあたる今年は、昨年度に実施した、取りあげてほしい講演内容のアンケート結果をもとに、「老化を学んで健やかに」というテーマを設定し、実施いたしました。この市民公開講座には、85名を超える一般市民、学生、教職員等の参加者がありました。

講演は本学科教員4名が担当し、はじめの加藤千恵次助教授による「目で見える老化－老化を画像で見る」においては、老化の様相を実際に目で見ていただくと共に、老化に伴う機能や代謝異常を早期に見いだせる画像診断法を紹介し、次いで渡辺明日香助手による「リラックス・ムーブメント－からだと心の老化予防－」においては、心身の老化予防のための運動を紹介し、実際に体験していただきました。次いで高波澄子教授による「社会と共に豊かに生きる」においては、高齢者の生きがいづくりや生活・安全を守る制度を紹介し、最後に浅賀忠義助教授による「姿勢と転倒防止」においては、寝たきりを招くおそれのある転倒を防ぐための姿勢について専門の立

場から話題提供をいたしました。

各講演の終了後には、質疑応答の時間を設けましたが、いずれの講演にも熱心な質問が寄せられ、参加された方々と共に人生を健やかに生きる方法を考えるよい機会となりました。

講演終了後にご記入いただいたアンケート調査ではそれぞれの講演を大変興味深く聴くことができたという方々が多く、来年以降の継続的な開催希望と共に寄せられたテーマに関するご要望を参考に、今後も多くの市民の方々に参加いただける公開講座を継続して開催する予定です。



「リラックス・ムーブメント」を実際に体験している様子

第2回医学部保健学科FDワークショップ報告

平成18年度保健学科FD実行委員会委員長 佐藤 洋子

第2回保健学科FDワークショップは、9月15日(金)、北海道自治労会館を会場に開催されました。本保健学科は、平成15年10月に開設され、現在学年進行とともに教育内容の充実を図り、さらに平成20年度からの大学院設置をめざし、その準備を進めているところです。そこで、学科長からこれに関連するFDを行うように提案があり、「大学院保健学研究科の特徴となるべき共通科目とは」をワークショップのテーマとして企画しました。

プログラムの前半は2つの基調講演及びミニレクチャーを行いました。はじめに基調講演1として、北海道大学大学院文学研究科人間システム科学専攻、仲眞紀子教授により、平成17年度魅力ある大学院教育イニシアティブで採択された「人間の統合的理解のための教育的拠点」の取り組みについてご講演頂きました。次いで、本学科境信哉助教授ならびに石津明洋助教授により、「平成17年度北海道大学教育ワークショップ(全学FD)参加報告」、のミニレクチャーがあり、続いて保健学科大学院設置WG委員長小林清一教授により、基調講演2

「大学院保健学研究科設置構想について」と題してご講演いただきました。

後半は参加者が6グループに分かれて、「大学院保健学研究科の特徴となるべき『専攻共通科目』について、授業科目を設計する」を課題として、共通科目のシラバスあるいは実習プログラム作成作業に取り組み、FD実行委員はタスクフォースに当たりました。活発なグループ討論終了後は、グループの代表者が、それぞれのプロダクトに関するプレゼンテーションと意見交換を行い、松野一彦学科長より講評を頂きました。

今回のFDワークショップのテーマは、大学院設置をめざす保健学科教員にとって関心の高いテーマとなり、教員の70%を越える51名の参加者があり、グループ討議も非常に活発でスムーズに進められました。今後も、本学科特有の問題などを取り上げ、教員の教育力と意識の向上を図るようなワークショップを企画したいと考えています。



仲眞紀子先生講演風景



ワークショップ全体討論の様子

医学部保健学科講座紹介

「看護学専攻成人・老年看護学講座」

医学部保健学科看護学専攻 助教授 宮 島 直 子

本講座は「成人看護学Ⅰ（成人慢性期看護学）」、「成人看護学Ⅱ（成人急性期看護学）」、「老年・精神看護学」の3つの分野で成り立っています。教員は、上野武治教授、武藤真佐子教授、松下通明教授を中心とした総勢8名です。完成年度である平成19年度には更に新しいメンバーが加わる予定で、看護学専攻のみならず保健学科で最も大きい講座といえます。

講座は、「青年期から壮年期及び老年期にある人々を対象とし、その生理的・心理的・社会的な特性や健康生活の特徴を明らかにし、各発達段階に特有な健康障害について教育・研究を行う」というかなり広範な領域に及んでいます。また、「医療の高度化に伴う看護上の諸問題や在宅高齢者看護、メンタルヘルスケア等、多様化する看護ニーズの時代的社会的要請に応えることを目指して看護の科学的実践とその理論的解明の探求を目的とした教育・研究」に取り組んでいます。

特に学生への教育では「柔軟な思考力」、「倫理的判断

力」、「科学的根拠」に基づく看護実践能力の育成に向けて、教育方法の検討を入念に行い、綿密な計画に基づく徹底した指導を行っています。但し、この様な指導は個別指導が主となりますので、かなり不足した教員数と時間の中で、教員個々の情熱によって辛うじて補われているのが現状です。

研究に関しては各教員の研究領域は多岐にわたり、また多彩な取り組みがなされています。多くは、看護教育方法の評価に関する研究や根拠に基づくケアの質の保証を目指して「臨床を科学する」ことに取り組んでいます。看護学問体系において自然科学の中に価値体系を導入し新しい科学体系を創造する必要性が主張され、それに向けた取り組みが多方面でなされています。本講座も「臨床を科学する」ことを通して未来を支えるニューサイエンスの礎となる研究に取り組む努力をしているところです。

平成18年度 医局対抗野球大会について

幹事 免疫・代謝内科学分野

平成18年度は第二内科が幹事医局となりました。試合日程の調整、球場の確保、会計、審判の手配等の仕事を担当させていただきました。各医局の先生方、医学部野球部等の御協力により無事に終了出来ました。ありがとうございました。

本年度も例年通り5月から1回戦を開始致しました。近年、大学への入局者、研修医の減少から、どの医局も9人を揃えるのは大変な状況となってきたようです。何年もこの大会に参加させていただいていますが、チーム構成員の高齢化が目立つようになってきているように感じています。医局野球人口の減少のためか、試合日程の調整が困難となるチームもあったこともあり、結局、

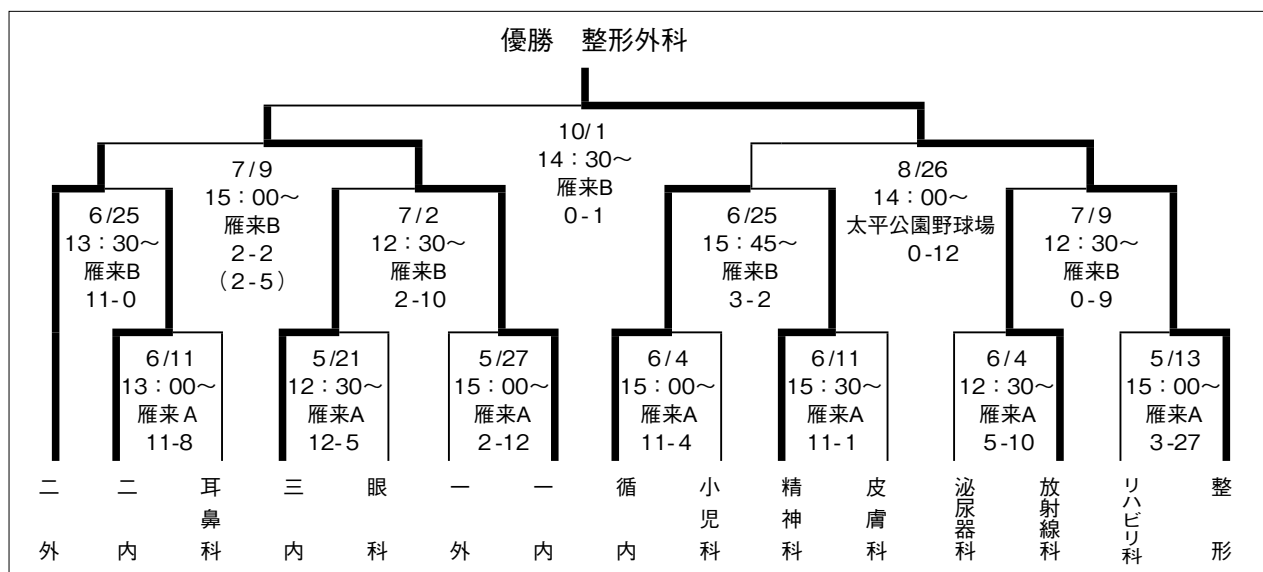
優勝チームが決まったのは10月になってからでした。幹事としては雪が降る前に終了できてほっとしています。

本年度の優勝チームは整形外科、準優勝チームは第一内科となりました。おめでとうございます。本年度の結果を記載したトーナメント表を作成しました。ご参照ください。

来年度も伝統ある医局対抗野球大会に多数の医局の参加をいただき、スポーツを通じ親睦を深めていただけることを希望しています。来年度の幹事医局は第三内科となっています。お仕事でお忙しい中大変だとは思いますが、大会運営の程を宜しくお願い致します。

(熊野 弘毅)

平成18年度 医局対抗野球トーナメント表



平成18年度 医局対抗サッカー大会

幹事 消化器外科・一般外科学分野

11月に毎年恒例の医局対抗サッカー大会が農試公園で行われました。1997年に最初に開催されましたので今年は10回の記念大会でした。14チームが参加し熱戦が繰り広げられました。普段の運動不足もあり、上手いサッカーというわけではありませんが、医局の名誉(?)をかけた真剣勝負ですから気合が入っています。決勝戦も終了ぎりぎりでの同点、延長Vゴールで勝負が決まる好試合でした。成績は優勝・第1外科、準優勝・スポーツ

医学、第3位・形成外科、第4位・第2外科でした。普段接する機会が少ない医局間の交流の場として、また異なる勤務先の医師が参加されることで医局内での交流の場としても良い機会となっています。来年も11月頃行われる予定です。例年通り熱い試合を、そして新しい医局の参加を期待しています。

(主管：第1外科 後藤)

お知らせ

◆ 医学研究科・歯学研究科合同慰霊式 ◆

医学研究科及び歯学研究科では、9月26日(火)午後1時30分からクラーク会館講堂において、この1年間医学・歯学の教育・研究・診療のため尊い御遺体を捧げられた180名の御霊の御冥福をお祈りする慰霊式を執行了しました。

慰霊式には、御遺族、来賓、総長、関係部局長、教職員、学生等約390名が参列しました。

式は解剖体御芳名奉読の後、参列者全員による黙祷を行い、続いて本間医学研究科長及び戸塚歯学研究科長から御霊の御遺志に報いるためにも一層の教育・研究・診療の発展に努めたい旨の追悼の辞が述べられた後、参列者による献花を行い、最後に本間医学研究科長から謝辞があり、慰霊式は厳粛のうちに終了いたしました。

(医学研究科・歯学研究科)

◆ 教務関係の主な行事予定 ◆

◇大学院

修士課程入学試験（追加募集）

1月29日(月)	9:00～11:00	外国語（英語）試験
	11:20～12:20	課題論文試験
	13:30～	専門科目試験
2月23日(金)	10:00	合格者発表

博士課程入学試験（後期募集）

（併せて論文博士の学位申請に係る語学試験を実施）

1月31日(水)	13:00～15:00	外国語（英語）試験
	15:20～	専門科目試験
2月23日(金)	10:00	合格者発表

研究生入学願書受付期間（平成19年4月入学・継続）

2月23日(金)～3月2日(金)

大学院修了関係

修士課程	2月13日(火)～15日(木)	公開発表
	3月8日(木)	修士論文最終審査（研究科教授会）
	3月23日(金)	修士学位記授与式
博士課程	2月5日(月)～9日(金)	公開発表
	2月22日(木)	学位論文最終審査（研究科教授会）
	3月23日(金)	博士学位記授与式

◇学 部

入試関係

- 1月20日(土)・21日(日)：大学入試センター試験
高機能センターB試験場担当
- 2月22日(木)：私費外国人留学生特別選抜
第2次選考試験（小論文・面接）実施
- 2月25日(日)：第2次試験【前期日程】実施
- 3月12日(月)：第2次試験【後期日程】実施

授業関係

1）平成18年度授業最終日・定期試験等日程

【医学科】

学 年	授業最終日	定 期 試 験
1年次	1月31日(水)	2月1日(木)～14日(水)
2年次	2月5日(月)	2月6日(火)～9日(金)
3年次	2月2日(金)	2月5日(月)～16日(金)
	基礎医学実習	2月19日(月)～3月9日(金)
4年次	1月26日(金)	1月29日(月)～2月5日(月)
	診断学実習（集中講義部分）	2月8日(木)～20日(火)
	共用試験C B T	2月6日(火)～7日(水)
	共用試験O S C E	2月23日(金)
5年次	3月9日(金)	

6年次卒業生の発表：2月9日(金) 10:00 公用掲示板

【保健学科】

学 年	授業最終日	定 期 試 験
1年次	1月31日(水)	2月1日(木)～14日(水)
2年次以上		

2）平成19年度授業開始日

【医学科】

- 1・2年次：4月10日(火)
3年次以上：4月2日(月)

【保健学科】

- 1年次：4月10日(火)
2年次以上：4月2日(月)

学士学位記授与式及び医学部学位記伝達式

3月23日(金)

- 10:00～ 学位記授与式 【本学第一体育館】
13:00～ 医学部学位記伝達式 【臨床大講堂】
同 終了後、卒業祝賀会 【第1会議室】

国家試験日程

区 分	試 験 日	合格発表日
医 師	2月17日(土)～19日(月)	3月29日(木)
保 健 師	2月23日(金)	3月27日(火)
助 産 師	2月22日(木)	
看 護 師	2月25日(日)	
診療放射線技師	3月1日(木)	4月6日(金)
臨床検査技師	3月2日(金)	
理学療法士	3月4日(日)	4月10日(火)
作業療法士	3月4日(日)	

◆ 平成19年度科学研究費申請状況 ◆

医学研究科・医学部

研究種目	審査区分	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	備 考
特別推進研究		1	0	0	0	1	
特定領域研究		33	28	42	45	14	計画・公募研究を含む
基盤研究（S）		3	3	4	4	4	
基盤研究（A）	一 般	9	9	5	5	8	
	海外学術調査	0	0	0	1	0	
基盤研究（B）	一 般	39	38	51	43	34	
	海外学術調査	1	2	2	1	2	
基盤研究（C）	一 般	33	41	54	51	55	
	企 画 調 査	1	2	1	2	0	
萌芽研究		63	62	67	66	64	
若手研究（A）		0	3	2	1	1	
若手研究（B）		6	20	27	27	20	
合 計		189	208	255	246	203	

—— お詫びと訂正 ——

広報第29号（2006年9月発行）9面掲載の「北大医学教育ワークショップ報告」の執筆者に誤りがございました。正しくは、下記のとおりです。お詫びして訂正させていただきます。

記

（誤）医学教育開発室長 前沢政次教授

↓

（正）医学教育開発室 小華和柁志助教授

編 集 後 記

医学部広報第30号をお届けします。1998年7月に岸編集委員長のもとで、第1号を発行してから9年目、多数の御協力をいただき、第30号を発行することができました。この間、歴代5名の委員長のもとで、延べ16名の委員が編集にかかわりました。当初は、記事が少なく、誌面を埋めることができるかどうかを心配した時期もありましたが、その後、定番記事が増えて、ページ数を増やした号もありました。法人化後、忙しくなったとの声をしばしば耳にしますが、多忙な中、原稿を寄せていただいた皆様ありがとうございました。

（佐藤松治）

—— Home Pageのご案内 ——

医学研究科／医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho//index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

kouhou-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発 行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
 060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先 医学事務部事務課庶務第一係
電 話 011-706-5892
編集委員 神谷 温之、西村 正治、高橋 光彦
 石津 明洋、田中 真樹、佐藤 松治